

グローバル人材育成に資する教科連携型の

Content and Language Integrated Learning(CLIL)の実証研究

—中学校における技能教科のパイロット・スタディー—

研究代表者 岩田昌太郎 (健康スポーツ科学講座)

研究分担者 齊藤 一彦 (健康スポーツ科学講座)

伊藤 真 (音楽文化教育学講座)

三村 真弓 (音楽文化教育学講座)

I はじめに

1. 研究目的

本稿の目的は、本邦の教科教育学と欧州の内容言語統合型学習 (Content and Language Integrated Learning ; 以下, CLIL と略記) を統合した, 技能教科における実証的な試行プログラムを行うことである。

筆者らは, 従来から本研究科と附属学校の共同研究にて連携してきた経緯がある。そのような中, 本研究の主題に向けて, 新しくグローバル人材育成に資する CLIL アプローチによる実証的な研究を義務教育の最終段階における中学校において技能教科に限定して実施を試みた。とりわけ, 技能教科でも音楽科と体育科を対象として, 実証研究を行った。

2. 研究内容

研究の目的を達成するために, 具体的な課題設定を以下のように行った。

- (1) 技能教科である体育と音楽において, CLIL を適用した授業実践を行い, 生徒の学力やパフォーマンスにどのような影響を及ぼすのかを明らかにする。
- (2) 2教科の連携における CLIL の実施によって, 教師の指導法やカリキュラム開発の力量形成にどのような変容をもたらすのかを明らかにする。
- (3) グローバル人材育成に資する人間形成を目指した生徒や教師のためのハンドブックや校内研修プログラムの開発と提案をする。

3. 本研究で期待される成果と意義

本研究を推進することで, 以下の3点の成果や波及効果が期待できる。

- 本研究科の専門スタッフ及び附属教員が CLIL を通して連携することで, 大学・附属間ならびに教科間の架橋に関する新しい知見や教科教育学のグローバル化に対する見解を模索できる。
- これらの成果は, 本研究科のグローバル教員養成プログラムや附属学校の研究推進に対する基礎資料となりうる。
- 世界には, 第2言語としての外国語教育法として, イマージョン教育 (カナダ), Content-based Instruction : CBI (米国中心), CLIL などといったアプローチがあるが, すべてに共通するのは「目標言語の熟達を促進する」といった点にある。今回は, CLIL

アプローチによる検証であるが、その成果は現在、本邦でも話題にあがっている IB 校やグローバル学校 (e.g. 広島県のグローバルリーダー育成校 など) におけるカリキュラム開発や CLIL 教師の職能開発 (professional development) の基礎資料となりうる。

(岩田昌太郎*)

II 音楽の授業における実践

1. 実践概要

①実践日時, クラスについて

実践日時: 2017年12月11日 3・4限目 および12月20日 1・2限目

実践学級: 附属M中学校 3年1組・2組

実践場所: 音楽室

授業者: J先生 (広島大学大学院生, スペイン人, 英語非母語話者)

音楽担当教諭のS先生が指導補助にあたった

②実践概要

事前に音楽担当教諭と授業内容と方法について協議を行い, グループ活動を主とした器楽合奏 (音楽科教科書掲載の教材《テキーラ》[C. リオ作曲/高山直也編曲]) をとり上げることにした。この教材は, ベースとなるラテン音楽特有のクラーク・リズムによって同じフレーズを繰り返しながら発展していく楽曲である。グループ活動では楽器を自由に編成することとリズム・セクションの工夫を図ることを求めた。指導計画, グループの編成と基本的な演奏の指導を音楽担当教諭 S 先生が日本語で行い (2時間), その後グループ練習をととした演奏の洗練と最終発表会を J 先生が英語で行った (2時間)。英語で行った2時間の授業の課題は, ①演奏技能の上達, ②表現の工夫, および③グループ内の協力によるアンサンブルの形成に焦点化された。

この2時間の授業では, 教師は指示・教示等を英語のみで行うが, 生徒間のやりとりは日本語で行った。授業に用いたパワーポイント資料やワークシートは英語で提示した。発表会の際のグループ紹介は英語で発話させた。他グループの演奏に対する感想と授業の振り返りの記入は英語と日本語のどちらでもよいことを伝えた。

③指導計画と評価

時間	生徒の学習活動	指導上の留意点	評価のポイント
1	1. 《テキーラ》について知る。 2. グループ練習に取り組む。 ・楽器の奏法を工夫する ・演奏表現を工夫する ・アンサンブルによる曲の構成を理解する 3. 発表会の打ち合わせをする。 ・楽器の配置を決め, グループの紹介文を作る	○パワーポイントで授業の流れと学習のポイントを提示し, 視覚的な理解を促す。 ○個人練習ではなくグループ練習を行うことを徹底し, 意識的に他者と音を合わせる作業ができるようにする。 ○学習上おさえておくべき英語表現を適宜確認し, 生徒の理解を促す。	◆グループ演奏のためのアイデアをワークシートに記述する。 ◆グループで協力して演奏表現の工夫に取り組む。
2	3. グループ練習の続き ・グループのオリジナルな表現を追究する ・発表会に向けて仕上げる	○パワーポイントで授業の流れと学習のポイントを提示し, 視覚的な理解を促す。 ○グループ別指導をとおして	◆他のグループの演奏評価と学習全体の振り返りをワークシートに記述

	4. グループ発表会	オリジナル表現の工夫のためのヒントを提示する。 ○グループで協力して練習を進めるように声かけする。	する。
--	------------	--	-----

2. 授業内の教師の発話

教師の発話のうち、特徴的な場面を例示する。

全体への説明：授業冒頭で《テキーラ》を説明する場面

<p><u>What song, you played last week, two weeks ago? – Tequila. Do you like Tequila?</u> (生徒：Yes.) Really? Drink? No, no, too young! I can drink. You can't drink. So, you will play <i>Tequila</i> with your instruments. Do you have your instruments? (生徒：首を横に振る) Not yet, OK. We will prepare it, <u>but before that, just one minute, OK?</u> (テキーラのフレーズを口ずさむ) You know the song, right? <i>Tequila's</i> rhythm comes from “<i>Mambo</i>”. Do you know <i>Mambo</i>? (生徒：Fish.) Ah, a fish! Fish Mambo! Funny face Mambo. But, there is “uhhh, Mambo!” It's a Latin, Cuban, South American dance music. It has a basic rhythm. (クラベ・リズムをウッドブロック/クラベスで叩く) Let's try together. <u>One, two, three, four!</u> (全員でリズムを叩く) This is the basic rhythm. Now, <i>Tequila</i> has this rhythm? <i>Tequila</i> has this rhythm? (生徒：Yes.) Where? Let's try again, together. <u>One, two, three, four...</u> continue, continue. Do you have the music score? (生徒：教科書の楽譜を開く) (ピアノパートの冒頭を弾きながら) Who is playing this part, piano? Then, this one. This <i>Tequila</i> song has this basic rhythm. Just remember Mambo's rhythm.</p>
--

グループ練習への介入

<p>○オリジナルな表現を探究するように促す Make an original rhythm, original part. <u>Together, OK? Always like</u> (実演して) ..., boring! ○グループ練習中に個人練習をし始めたことを注意する Can you play together? Everybody! Now, what do you do? Group practice or <u>alone practice</u>? Which one? You do group practice, OK? <u>Together, OK?</u> Continue, group practice. ○リズムが合わないグループへの指導 OK, wait. <u>The rhythm is... tahhn tahhn...</u> Who is playing the rhythm? OK, practice. <u>One, two, three, four...</u></p>

3. 実践の考察

①学習活動を促進する手立て

生徒の理解を促し、学習活動を前に進める手立てとして、以下のことが見いだされた。

第1に、文法的に正確な英語表現をせず、簡略化した表現で理解を促すことである。口語表現では断片的な文章表現が多用される。文法的に正しい英語表現を基礎とするものの、あえて主語や動詞を省略したり、キーワードのみを繰り返したり（二重下線部 ）、文法的には誤りであるが生徒の理解度を考慮して別の言葉で言いかえをしたり（波線部~~~~~）することによって、活動を停滞させないことを実現していた。

第2に、演奏表現の技術的指導では言葉による説明を最小限にとどめ、実際に音で示すことである（下線部 ）。音楽の授業では、「音や音楽の特質を言語的に表現し、言語的

に伝達することは極めて困難」(吉富, 1999)であるため, 実際に音楽的モデルを提示する教授行動が最も重要となる。

第3に, 学習活動に入る前に生徒が理解しているかどうか確認することである。上記以外に次のような場面がみられた。

○配布したワークシートを見ながら目標を確認する場面で objective の意味を確認する So, what does “objective” mean? Who know “objective”? ○他のグループの演奏を聴いて感想を書く場面で impression の意味を確認する After the “Objectives,” write down the impressions you have. What is “impressions”?

②CLIL における Communication

CLIL では「4つのC」である Content (内容), Communication (言語), Cognition (思考), Culture/Community (協学) を統合することが重要である。そのうち Communication の枠組みで授業に着目すると, 3種の言語(渡部ほか, 2011)が確認できた。

まず, 第1の「学習の言語 language of learning」(=テーマの理解に直結する言語材料)には, パワーポイント資料やワークシートで提示した楽器名や音楽の授業で頻出する用語・表現(performance, group practice, rhythm, melody, stroke, arrange, Set/Take away the instruments. など)が合致する。第2の「学習のための言語 language for learning」(=英語で何かを学ぶ際に必要な表現や学習スキル)には, 活動の流れを示す表現(We have five steps. First... Next... Then...など)や, 一般的な学習に関わる用語・表現(decide, try to..., prepare, objective, impression, reflection, Can you talk with your friend? など)が位置づく。第3の「学習を通しての言語 language through learning」(=すでに学んだ言語材料や学習スキルを組み合わせる言語習得を加速させる)には, 学習対象となる楽曲の情報を得て, すでに獲得した演奏技能を発展させ, グループ活動で作品を創出し発表を行う一連の学習過程であると解釈できる。

③生徒の学習の成果

最後の授業に参加した70名のワークシートの記述を分析した。ここでは特に英語の記述の有無とその内容に着目する。

【他のグループの演奏を聴いた感想】

英語で記述したのは27.1%(19名), 日本語のみで記述したのは72.9%(51名)であった。文法的な誤りや表現のバリエーションの乏しさから, 評価するための表現法を学習する必要性が浮かび上がった。以下に記述例を示す。

• Each good point of instruments and two parts in a person is good. I wanted more enjoying. (=ひとつひとつの楽器のよさが出ていた。1人2役もよかった。もっと盛り上がり欲しかった。) • Using voice was very original, so I think it is an good idea . Also, they were shouting in a big voice, so we could hear it clearly. I want to do it, too.
--

【学習活動の自己評価】

3つの自己評価項目について4段階(A~D)で評価した。すべての生徒がAまたはBの評価をしており, 70%以上の生徒がA評価をした。

自己評価項目

1. I did my best in the practice.	A 評価 72.9% (51名)
2. I tried to collaborate with my group members.	A 評価 84.3% (59名)
3. I enjoyed playing in the performance.	A 評価 87.1% (61名)

【授業全体の振り返り】

英語で記述したのは 20.0% (14名)、残り 80.0% (56名) は日本語で記述した。以下に記述例を示す。下線部は授業で出てきた表現を用いて文章を構成した箇所である。波線部はスペルミスである。

I was wrong many part. But, I tried to collaborate with my group members. And I enjoyed performance. Also, my group didn't arange but I tried *cresc.* and *dim.*

4. 音楽の授業実践をとおして (小括)

本授業実践を CLIL の「4つのC」の枠組みで整理する。第1の Content (内容) は、ラテンリズムの音楽と合奏表現の工夫であった。第2の Communication (言語) は、先述したように音楽用語、グループ練習の進め方、および個から小集団、全体へと学習が発展する学習過程であった。第3の Cognition (思考) は、これまでの音楽学習で蓄積したことを活用し、試行錯誤をとおして新たな演奏表現を創造することであった。第4の Community / Culture (協学) は、学習活動の面ではグループの協力をもとにした練習と発表であり、学習内容の面では異文化の音楽である《テキーラ》の音楽的特徴の理解であった。

授業の課題として設定した、①演奏技能の上達、②表現の工夫、および③グループ内の協力によるアンサンブルの形成、の3点については、生徒の学習活動の様子や発表会での演奏から概ね達成できたと評価できる。音楽的内容に関する学びは、「音楽」という(教科の)特性から言葉以外のジェスチャーや音そのものによって向上・洗練されていった。技能や表現に関する教師の言語的教授行動も少なく、実演をとおして課題の達成に向かっていった。つまり、英語の使用は教科の技能に関わる能力には大きな影響を与えていない。

一方、コミュニケーションに関する学びは、授業の中で常に「協力して取り組むこと」が協調され、繰り返し「Let's try together!」「Together, OK?」などの声かけがなされることによって達成へと導かれた。また、わかる生徒が理解の追いついていない生徒に教える場面もみられた。このように、グループ活動によって理解の助け合いをすることが、授業を成立させる要因の1つとなるといえる。音楽担当教諭からは、普段の日本語で行う授業にはない協力体制がみられたことが指摘された。このことは、クラス全員が英語を使うという共通の困難に立ったことに起因する。その一方で、生徒は英語で表現することに慣れておらず、また彼らの英語レベルがある程度に限定されることから、授業を総括する場面で教師が複雑な考えや気持ちを伝えることができなかつた。このことは、逆に日本語で気持ちを伝えることの重要性を再認識する契機となった。言語による特性も関わるが、場面に応じて英語と日本語を適切に使い分けることの必要性を示唆している。

今後の課題は、音楽科において CLIL が適用可能な活動領域、単元、教材を検討したうえで、取り組みを定期的に継続し、Language through learning を強化していくこと、それに伴って英語の4技能のバランスを図ることである。

(伊藤 真*・三村真弓)

Ⅲ 体育の授業における実践

1. 実践概要

日時：2017年10月17日～11月10日

学級：附属M中学校3年40名（男女共習）

場所：体育館

授業者：初心期の体育教師X（A大学大学院博士課程前期，日本人，TOEIC 920点）
保健体育科教諭のY教師（教職歴4年目）が指導補助にあたった。

2. 実践した授業内容の概要

単元は、器械運動（マット運動）とした。単元の選択理由として、マット運動は体育館という安定した環境において行われるクローズドスキルの要素が多く、英語での教え合いが容易になると考えた。体育のCLIL（PE-in-CLILと略記）の概要として、単元前半の4時間でグループごとにマットの技能練習を行い、後半の5時間においてシンクロマットの演技練習と発表会を行った。

なお、シンクロ演技は、音楽や仲間と合わせて思考して構成を考えて踊るため、オープンスキルに分類される。また、9時間の授業の中で英語での授業に対するフォローアップや日本語での授業との比較検討をすることも考慮して、3時間目と7時間目に日本語での授業を行った。

3. 調査内容と方法：分析の手続き

（1）生徒の学習成果について

Coyle *et al.* (2010) は、CLILの「4つのC」の枠組みを整理している。そこで体育の特性を踏まえて、「4つのC」を①Content（技能）、②Communication（コミュニケーション）、③Community（仲間作り）、④Cognition（思考）と捉えることとした。そして、以下に具体的な「4つのC」の調査内容と方法について示している。

①Content（技能）に関して：技能については、1時間目に前転・開脚前転・後転・開脚後転・伸膝後転・側転・伸膝前転・倒立前転・ロンダートのスキルチェックを行い、その中から各自2つ以上の習得技を決めて、4時間目と9時間目で習得技のスキルチェックを実施した。授業後に教師によって行った評価を用いて、4点、3点、2点、1点と点数化し、平均値と標準偏差にて分析を行った。

②Communication（コミュニケーション）に関して：コミュニケーションについては、2つの側面から調査を行った。1点目は、「コミュニケーション基本スキル尺度」（堀毛，1994）を用いたアンケートであり、2時間目（英語）と3時間目（日本語）、6時間目（英語）と7時間目（日本語）に実施した。質問は全部で15項目設定し、5件法で回答させた。そして、回答を点数化し、分析を行った。2点目は、各グループにおける会話内容の検証である。各グループ1名ずつに、腕時計型のボイスレコーダーを装着させ、グループ内での英語、日本語での会話を毎回録音した。

③Cognition（思考）に関して：思考については、毎授業後に英語による自由記述の感想を回収し、「ブルーム・タキノミー」（梶田，2002）による自由記述の評価基準に基づき、それぞれの思考段階に分類した。

④Community（仲間作り）に関して：仲間作りについては、「仲間作り調査票」（高橋，2003）を用いたアンケートを2時間目，5時間目，9時間目に実施した。質問は全部で10項目あり，回答は3件法を用いた。そして回答を点数化し，分析を行った。

（2）X教師の成長

初心期のCLIL教師の成長を把握するために，以下の3点を調査した。第1に，PE-in-CLILを初めて実施するにあたり，日々の実践の「悩みやそれに対する改善案」を日記として記述してもらった。第2に，CLIL実践の事前・事中・事後にインタビューも実施した（メリアム，2004）。第3に，実践後の協議会での発言も録音した。

4. 結果と考察

（1）「4つのC」における生徒の変化について

第1に，Content（技能）の結果である。分析の結果，事前（ 2.37 ± 0.82 ）と事中（ 3.12 ± 0.96 ），事前（ 2.3 ± 0.82 ）と事後（ 3.50 ± 0.78 ）の間で技能のレベルが有意に高値を示した。すなわち，今回のPE-in-CLIL実践を通して，クラス全体のマット運動における技能の向上がみられた。

第2に，Communication（コミュニケーション）の結果である。分析の結果，授業時間に関わらず英語によるコミュニケーションより，日本語によるコミュニケーションを活用する傾向がみられた。しかし，PE-in-CLILの授業回数を重ねていくに従って，英語によるコミュニケーション・スキルの値も高値を示した。

第3に，Community（仲間作り）の結果である。分析の結果，事前（ 2.59 ± 0.58 ）と事後（ 2.81 ± 0.45 ），事中（ 2.60 ± 0.59 ）と事後（ 2.81 ± 0.45 ）で「仲間作り調査票」の項目の得点が有意に伸びていた。

最後に，Cognition（思考）における記述の結果である。分析の結果，「思考」の推移段階に記述のレベルが顕著に変容させた生徒はあまりみられなかった。

（2）X教師におけるPE-in-CLIL実践を通しての実態と課題について

PE-in-CLILの実践における研究課題は，【RQ1】PE-in-CLILを実践する際の特徴と問題点は何であるか，【RQ2】初心の体育教師（X教師）がPE-in-CLILを通してどのような専門的な学びを成すのか，の2点を設定した。

まず，RQ1について述べる。第1に，「Content（技能）」の選定における重要性である。体育の学習内容は，選択する種目特性に規定される。今回のPE-in-CLILでは，単元前半の技能練習（クローズドスキル）においては，積極的に英語を使用する場面が多くみられたが，単元後半のシンクロ演技（オープンスキル）のグループ協議の場面ではその頻度が減少する傾向にあった。なぜならば，多様な思考や相互のコミュニケーションが必要になる学習内容になると，連動して個々の英語力やコミュニケーションが障壁となっていたからである。したがって，PE-in-CLILを実践する際には，上述したようにCLILのバリエーションを考慮する必要があるであろう（Coyle *et al.*, 2010）。第2に，「仲間作り（community）」と「コミュニケーション（communication）」のバランスである。今回のPE-in-CLILでは6つのグループをつくって学習をすすめた。その中でも，生徒間の関係性

が良好なグループでは、コミュニケーション（とくに、ノンバーバルなコミュニケーション）が活発に行われており、技能の伸びも顕著であった。一方、そうでないグループは、技能の伸びもあまりみられなかった。したがって、グループ内の関係性を基盤としながらも、コミュニケーション能力を活性化させることが技能の伸びにもつながっている。

次に、RQ2 について述べる。CLIL を実践する体育教師としての専門的な学びについて議論したい。データを分析した結果、初心期の X 教師は、PE-in-CLIL の実践を通して次のような専門的な学びを習得しようとする様子が窺えた。

最初の学びの転機は、初心期の体育教師として、マネジメントと教授技術に苦悩しながら、その指導技術を変容させていったことである。もちろん、教師 X の英語力は高く、英語表現についても十分であるが、初心期という特徴から体育授業のマネジメントと教授技術に課題を抱えていた。しかし、単元が進むにつれて、生徒との人間関係や生徒のつまずきに合わせた学習内容の改善に気付くようになり、その課題は徐々に解決されていった。

次の学びの転機は、メンターや教師教育者との同僚性である。Saito and Atencio (2013) は、メンターや教師教育者のような役割の者が、単に罰則や否定的なコメントを提示するのではなく、協同的な支援を提供することが重要であることを指摘している。今回の PE-in-CLIL の実践に関しても、メンターや教師教育者から随時、フィードバックを受けながら授業改善を重ねていった経緯がある。したがって、PE-in-CLIL を実践する際には、協同的 (collaboration) に関わり合いを持ちながら、CLIL 教師のつまずきや課題に対して肯定的な省察 (reflection) を促す支援をしていくことが鍵となるであろう。

5. PE-in-CLIL の授業実践を通して（小括）

上述の通り、PE-in-CLIL の授業実践の結果、クラス全体のマット運動の技能向上がみられ、さらに英語によるコミュニケーション・スキルも向上した。また、CLIL 教師としての職能成長をさせる可能性も示唆している。グローバル人材育成を推進するためにも、今後、このような授業実践が広がっていくことはわが国の体育科教育においても喫緊の課題である。

一方で、PE-in-CLIL の推進においては、次の点は今後の課題であろうと思われる。

- ①本授業実践から、マット運動における技能向上が確認されたが、これが PE-in-CLIL を用いて授業実践したことによる効果なのか、それとも、単にマット運動の練習時間による技能向上であったのかは、現時点では判明できてはいない。つまり、統制群との比較検討も今後必要であろう。
- ②本単元を実施する上での「評価」についての検討が十分ではない。体育的視点に立った評価に加え、「英語」に関する力がどのように変容したのか等、PE-in-CLIL の実践における「評価」そのもののあり方についての検討も必要であろう。

とはいえ、PE-in-CLIL の実践や、そのための研究は、まだ、緒に就いたばかりである。今後、様々な検討や分析が行われ、その上での議論が活性化することを切望する。

(齊藤一彦*・岩田昌太郎)

IV おわりに：総括と今後の課題

以上の音楽科と体育科における CLIL 実践の結果と考察から、本稿で掲げた3つの問い

について総括する。

(1)「技能教科である体育と音楽において、CLIL を適用した授業実践を行い、生徒の学力やパフォーマンスにどのような影響を及ぼすのか」について

○音楽科の CLIL 実践を通して、演奏技能の上達や表現の工夫がみられ、生徒間の協力体制も強化された。英語によるコミュニケーション・スキルについては、ほとんどの生徒が英語で表現することに慣れておらず、また英語の発話を強く要求しなかったために、双方向のコミュニケーション・スキルの向上をめざした指導方法について検討が必要である。

○体育科の CLIL 実践を通して、PE-in-CLIL の授業実践の結果、クラス全体のマット運動の技能向上がみられ、さらに英語によるコミュニケーション・スキルも向上した。また、PE-in-CLIL を実践する体育教師として専門的な学びや成長が促される可能性が示唆された。しかし、今後、統制群との比較検討といったアプローチからも検討が必要である。さらに、PE-in-CLIL の実践における「評価」そのもののあり方についても検討が必要である。

以上より、今後の課題は、技能教科において CLIL が適用可能な活動領域や種目、そして単元や教材を検討したうえで、取り組みを定期的に継続し、CLIL の特徴である文化間の知識の共有や言語習得のプロセスも強化していくことが肝要である。さらに、それに伴って英語の4技能のバランスを図ることも大切であろう。

(2)「2教科の連携における CLIL の実施によって、教師の指導法やカリキュラム開発の力量形成にどのような変容をもたらすのか」について

○両教科共に、CLIL 教師としての指導法やカリキュラム開発の際には、実践者やメンター（教科指導や英語教師など）、そして大学教員といった教師教育者の役割が重要であり、共同的に取り組むことが必要不可欠である。そのためにも CLIL 教師のために、日本固有の「授業研究（Lesson Study）のサイクル」（Lewis et al., 2006）と通して、継続的かつ協働的に省察（reflection）を促すような支援体制を整備し実施していくことが肝要である（図1）。

(3)「グローバル人材育成に資する人間形成を目指した生徒や教員のためのハンドブックや校内研修プログラムの開発と提案」について

○技能教科の2教科と限定された実践に留まったが、生徒や教員のためのハンドブックとしての基礎資料を得ることができた。

○CLIL 教師の育成を意図した校内研修プログラムの一端として、今回の CLIL 実践が基礎資料として、今後の開発や提案の契機となった。

以上が本稿における総括である。しかし、今回の実践では、技能教科としても限定的かつ事例的であり、様々な校種間や教科間における比較検討も必要である。その点については、引き続き、広範囲に適用できるように事例研究を重ねていきたい。

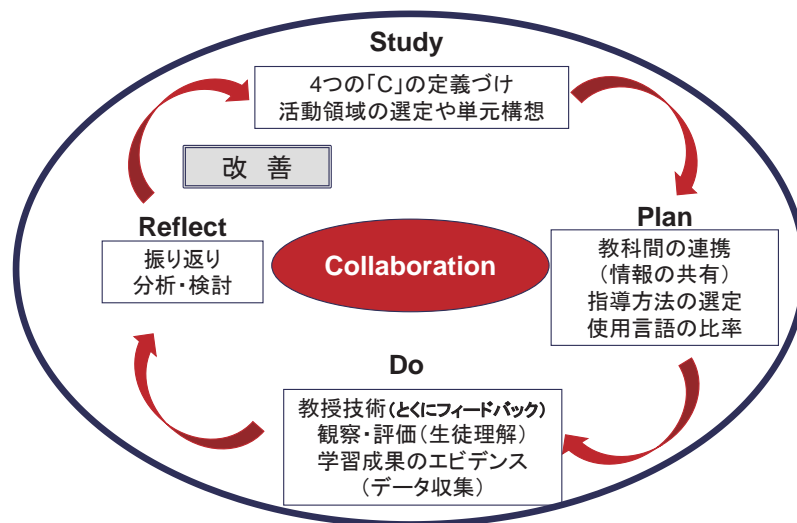


図1 Lesson Study を基盤とした CLIL 実践の概念図

(岩田昌太郎*)

引用文献

- Coyle, D., Hood, P. and Marsh, D. 2010. "CLIL: Content and language integrated learning." Cambridge: Cambridge University Press.
- Lewis, C., Perry, R., and Murata, A., 2006. "How Should Research Contribute to Instructional Improvement? The Case of Lesson Study." *Educational Researcher*, 35 (3) : 3-14.
- Saito, E. and Atencio, M. 2013. "A conceptual discussion of lesson study from a micro-political perspective: Implications for teacher development and pupil learning". *Teaching and Teacher Education*, 31: 87-95.
- 梶田叡一 (2002) 『教育評価 第2版補訂版』. 有斐閣双書.
- 堀毛一也 (1994) 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル. *実験社会心理学研究*, 34: 116-128.
- 高橋健夫 編著 (2003) 『体育授業を観察評価する 授業改善のためのオーセンティック・アセスメント』. 明和出版: 東京, pp.16-19.
- メリアム: 堀薫夫ほか訳 (2004) 『質的調査法入門—教育における調査法とケース・スタディー』. ミネルヴァ書房: 京都.
- 渡部良典・池田真・和泉伸一 (2011) 『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たなる挑戦 第1巻 原理と方法』. 上智大学出版.
- 吉富功修ほか (1999) 『音楽教師のための行動分析』. 北大路書房.